# 教職履修カルテの意義と課題

草川 剛人[†]　樋浦 郷子[‡]　横山 明子[‡]
帝京大学経済学部地域経済学科[†]
帝京大学理工学部総合基礎科目[‡]

**概要**

宇都宮キャンパス教職課程においては，学生の履修履歴の把握，および教職実践演習のために 2010 年度より教職履修カルテを準備し，その記載が始まった．翌年度の 2011 年 9 月より LMS に電子化された教職履修カルテが用意され，教職履修カルテの運用が始まった．そして，2013 年度後期に4年次の開講科目である「教職実践演習」において，この教職履修カルテを活用した授業が初めて開始された．本稿では，この教職履修カルテを教職実践演習の中において活用した事例を紹介し，学生にとって教職履修カルテを書いて授業に活用する意義，および教員にとっての教職履修カルテを記載する意義について考察した．

## 1.　はじめに

2006 年 7 月の中央教育審議会の答申「今後の教員養成・免許制度のあり方について」[1] の提言の中で，教員養成の質的向上のために，学生の履修履歴の把握，および教員としての資質能力の形成の確認を目的とする新科目の「教職実践演習」で活用するために教職履修カルテの導入が示された．以下教職カルテと記載する．

宇都宮キャンパス教職課程においては，この教職カルテは，2010 年度より紙媒体のものを準備し，2010 年度入学者より教職カルテの記載が始まった．また，翌年度の 2011 年 9 月から LMS（Learning Management System）に教職カルテが用意され，電子化された教職カルテの運用が始まった．

この教職カルテへの記載について，学生は教員免許のために履修した全ての科目，すなわち，「教職に関する科目」，「教科に関する科目」，「教科または教職に関する科目」，「66 条の 6 の科目」の全てについて学修内容の振り返りを記入し，さらに各学年末には，それらの学修を総括するための項目（総括的シート）について記入することにした．さらに，介護体験実習や教育実習などの学外実習についても省察した内容を記載することにした．

なお，「66 条の 6 の科目」とは，教員免許法施行規則第 66 条に定められる必修の履修科目である．1998 年の法改正により，それまでの「日本国憲法」「体育」に加えて「英語コミュニケーション」「情報機器の操作」が入ることとなった．

一方，教員は「教職に関する科目」は全ての科目を教職担当教員が記載し，「教科に関わる科目」については，その授業担当教員が可能な限り記載することにした．その他の「総括的シート」，「66 条の 6 の科目」と「教科または教職に関わる科目」については記載しないことにした．また実習関係については「介護等体験シート」のみ教職担当教員が記載することにした．

そして，2013 年度 4 年次後期に，教職カルテを活用した「教職実践演習」の授業が初めて開講された．

本稿では，この教職カルテを「教職実践演習」の授業において活用した具体的事例を紹介し，学生にとって教職カルテを記載し授業において活用する意義，および，教員にとっての教職カルテを記載する意義について考察する．

---

Significance and challenges on introducing the e-portfolio into the teachers' training course
Takato Kusakawa[†], Satoko Hiura[‡] and AkikoYokoyama[‡]
[†]Department of Regional Economics, Faculty of Economics, Teikyo University
[‡]Faculty of Science and Engineering, Teikyo University

## 2. 学生にとっての教職履修カルテ

### 2.1 授業実践例

帝京大学宇都宮キャンパスにおいては，4 年次後期に原則として 20 名以下の 2 組に分けて教職実践演習を展開することとした．

そして初年度である本年，中学校・高等学校見学や本キャンパス OB 教員の講演等 15 回のうち 4 回は 2 組合同で実施するという柔軟な構成で実施した．

さらに，教職カルテを用いた授業実践については，この 2 組のうちの樋浦が担当した授業を報告する． この樋浦の担当授業においては，15 回の授業のうち，第 1 回から第 4 回までこの教職カルテを活用した授業を行った．第 1 回目から第 4 回目までの授業計画と評価を表 1 に示す．さらに図 1 と図 2 は学生の具体的事例である．

表 1　　教職履修カルテを活用した授業計画

| | |
|---|---|
| 第 1 回<br>カルテを見直す | 4 年間に及ぶ教職課程における学びの総復習．自らの教職カルテを，すべて印刷してファイルに綴じる．その際，「総括的な評価と成長確認」欄をとくによく振り返り，レーダーチャートが学年を追うごとに大きくなっているか確認する． |
| 第 2 回<br>課題の発見 | 教職カルテをすべて印刷して綴じたファイルを提出し，「教職に関する科目」「66 条の 6 に関する科目」の中から，4 年間の中で最も弱かった点や，興味を持って深めたい課題を見つける．専門科目については，15 回の授業の後半の模擬授業を通じ克服を目指す． |
| 第 3 回 および 第 4 回<br>課題の克服 | 各学生はプレゼンテーションソフトを用いた発表形式で，自らの課題をどのように検討し，深めてきたかを発表する．他の学生は発表に対して，積極的な質問や議論への参加が求められる．参加者全員の発表を行う．発表時間は 10 分以内とする． |
| 評価 | カルテの記入，ファイルの提出，課題を自ら見つけそれを発表する，他者の発表を聞き議論をする，課題を克服する，という活動を通じて各項目を点数化し，最終的には期末評価の 30 パーセントとして組み込む． |

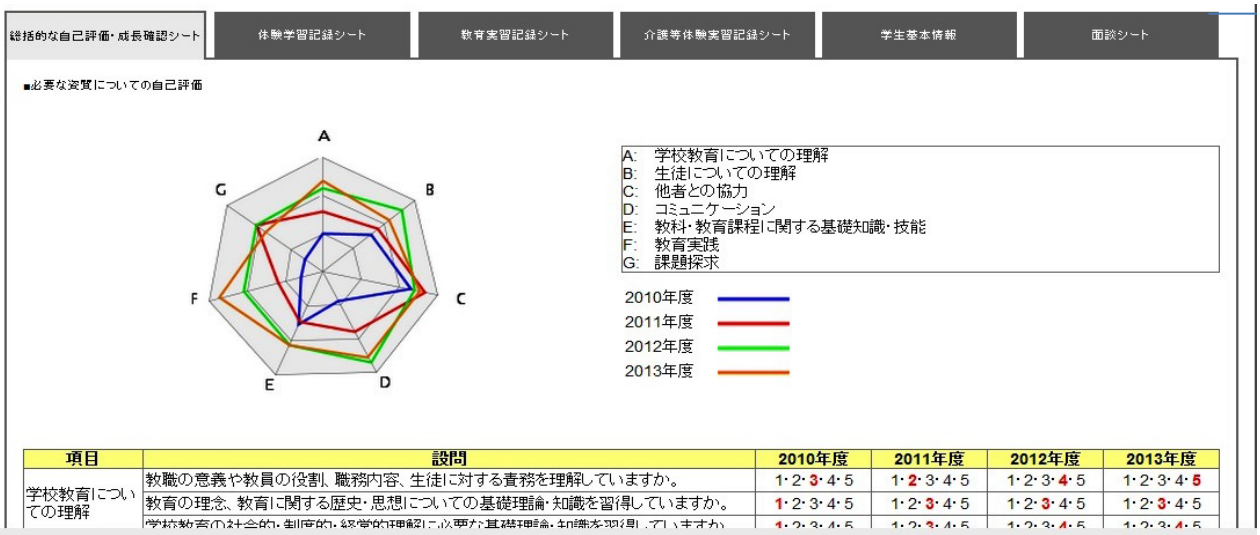
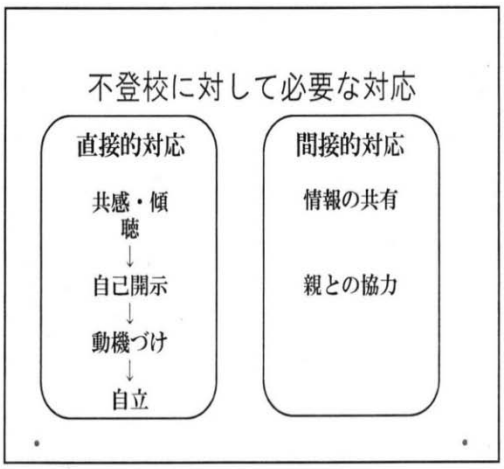



図 1　　学生が記入したレーダーチャートの一例



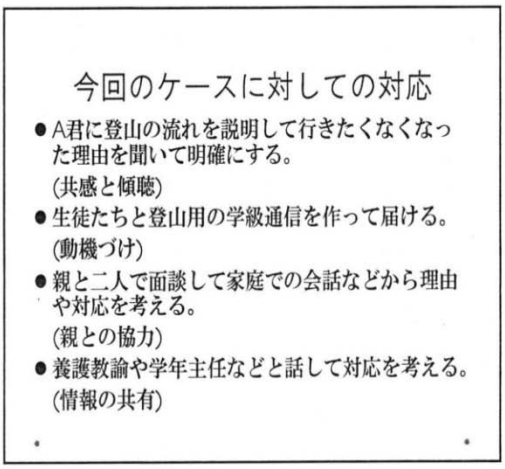




図 2　課題克服プレゼンテーションの一例(抄)

第 1 回では，自らの教職カルテのうち，特に「総括的な評価と成長確認」欄を振り返り，図 1 に示すようなレーダーチャートの学年別の変化を確認した．第2回目では， 4年間の中で最も弱かった点や，興味を持って深めたい課題を考察した。

第3回目から第4回目はそれにもとづく発表を行った．図 2 の発表を行った学生は，3 年次前期に履修した「生徒指導・進路指導論」において学習した不登校という問題に対して，カルテを通じ自らの理解不足を再認識した．そして実際に受験した教員採用試験において，不登校への対応について出題された体験から，この問題についていっそうの理解をしたいと考えたのだという．

ほかに，「66 条の 6 の科目」である「英語コミュニケーション」に苦手意識を持ち続けた学生が，「学校内の英語」をテーマに発表した．また，「介護等体験実習」で特別支援教育に関心を深めた学生は，「発達障害の分類」というテーマで発表を行った．

これらの事例は，教職履修カルテ・「教職に関する科目」「66 条の 6」科目・介護等体験や教育実習，そして採用試験という各要素が有機的連関性をもつようになったことで，学生がみずから教育者としての課題を見つけ，一定の考察を行うことができた事例といえる．

### 2.2 実践担当者の考察

この授業実践を通じて残された課題や展望として次の 3 点を挙げたい．第一に，1 年次から継続して記すことに対する学生のモチベーションを維持するための工夫が求められることである．

第二に，教職カルテの中の「総括的な評価と成長確認」欄や印刷するにあたっての「一括 pdf 化」ボタンの存在がほとんど知られていないなど，学生に十分な活用のための知識が不足している点である．このために次年度からは，少なくとも各年次 1 時間を割いてコンピュータ教室で丁寧に指導する必要を感じた．

第三に，こういったしくみを，将来的には教職課程以外の学生に少しずつ広めてはどうかということである．その理由は，LMS に教職カルテを一体化したことで，専門科目も含めて自分の 4 年間の学びの振り返りが可能であるという点にある．非常に高度で充実した機能を有する，質の高いシステムであると感じられるため，全学生にとってメリットがあるのではないかと考えられる．

現在，帝京大学だけでなく，大学教育一般に対してポートフォリオ，とくに e-ポートフォリオの充実が盛んに指摘され検討されて始めている．この教職カルテシステムは，こうした高等教育に対する社会的現代的要請にも十分に応えることのできるシステムであるため，一層の活用が望まれる．

## 3. 教員にとっての教職カルテ
## —教職カルテを打つということ—

教職カルテを打っていて気づいたことがある．草川が教職カルテを「打つ」と表現するのは,「打つこと」と「書くこと」が文章を作る上で異なると考えるからである［2］.

草川の担当する教職科目の授業,例えば「教職論」では，毎時間学生を 4 人グループに編成してテクスト又は資料をグループ内で順番に音読してもらい，そのときに学生が掴んだ論点や疑問点，時には読めない漢字，意味の掴めない用語などをグループ内で議論してもらいグループごとに発表するという方法を取っている．テクストや資料は，芦田恵之助，宮沢賢治，東井義雄，遠山啓，斎藤喜博，小原國芳，大村はまなどの近・現代日本の教師たちの授業の創り方，教育観及び子ども観などの哲学と教師としての人生について教育学者の書いた文章である．授業の終わりにその日のテーマを提示して 15 分間で原稿用紙 200 字にレポートを書いてもらう．音読は，教師が授業をする時の声の出し方を草川がグループを回って確かめる．読みがスムースでない学生や誤読しやすい学生，声が籠ってはっきりと読めない学生には草川が指摘する．時には授業の中で注意し,「読む前に深呼吸して大きく息を吸い込んでごらん，読むときは息を吐き続けることだから」とアドヴァイスする.

これらの方法は,「学びの共同体」の授業方法である. とにかく講義という「受ける授業」では教師に必要な「読む力」「書く力」「考える力」「まとめる力」「発表する力」など将来教職に必要な力は身に付かないからだ.

「教職論」だけでなく,「教育課程論」「教育経営論」「教育実習指導」「社会科・公民科教育法」「社会科・地理歴史科教育法」「教職実践演習」などすべての科目で試みている.

この方法の根底には,「教師の責任は教室にいる全ての学生の学びの可能性を保障することにある」という哲学がある．そうして学生が学ぶ内容は，レベルが高いものでなければならない.

学力とは英語の“achievement”：到達，達成の訳であるが，これを「学力」と訳した点に問題がある．最近では，佐々木賢が「学力とは何か．英和辞典にはアチーブメントとあり，達成・成功の意味だが、日本では主観的であいまいに使っている.」［3］と述べている．また，谷川裕稔らは、「まず『学力』についての定義を行ないたいのですが，これが大変です.（中略）なかなか「学力」論争に終焉をみないのは，当然のことですが『学力』対する識者（研究者，現場の教師,評論家）のスタンスが異なるからです.」［4］との指摘がある．さらに佐藤学は,「ちなみに『学力』の意味が拡張したり混乱したりするのは「achievement」を『力』として見ているからです.『学力』という翻訳語の漢字の意味が事態をややこしくしています．つまり「achievement」の実体ではなく機能を見て『力』と認識しているのです.（中略）したがってここでは『学力』を「学校で教える内容」の「achievement」（＝学びによる到達）として定義することにします.」［5］と述べている.

すなわち，授業を通じてテクストのレベルに到達させることである．学力は，学生がレベルの高い＝むずかしいテクストに挑戦する時に，例えて言えば高いレベルを目指して全ての学生が背伸びする時に付くのである.

ではこれらの授業を受けた学生一人ひとりの教職カルテをどのように打つのか．以下は草川の方法である.

第一に，学生が身に付けた力を評価する文言を打つ．例として次のようなコメントがあげられる.

・「あなたは音読で読む力を付けました．それはグループで発表した時に示されています.」
・「レポートを書いて行くうちにあなたには書く力が付きました．この力は授業を創る時，板書をする時に役立ちます.」

・「以前より読む力は付きましたが，まだ不十分です．この読み方では，授業をした時に生徒には聴きにくいと思います. これからの教職の授業で読む力をさらに付けてください.」
・「グループでの音読の時は，読み方がたどたどしかったあなたもロールプレーイングの時のクラス全体へ向けての発表の時は見違えるほど声が出ていました. あなたが自分から申し出てオフィスアワーの時に研究室に来てもらい声の出し方を練習した成果です. やればできます. 書く力についてもさらに付けてゆきましょう.」

この教職カルテにはこのように授業で学生が獲得できたことを必ず書く．どの学生も教師を目指して授業で力を付けたいと思っているからである．読む力や書く力が付いていない学生ほどこの思いは強い，だからできない学生ほど伸びしろが大きいのだと考えている．「学ぶということは，ただそれだけで何かが変わることである.」かつて中・高校生を教えていた時に出会った哲学者でソクラテス研究者の林竹二の言葉である．「ただそれだけで」と「何かが」の部分が授業を終えるときの草川に響いてくる. 学生のレポートに「何かが」の部分に当てはまることが書かれているときに嬉しくなる．授業という営みが奥深くて創造性を持つものであることを実感できる瞬間である．

教職カルテは，4 年生後期の教職実践演習の授業で活用しろと文部科学省はのたもう．教育実習を終えた学生が教師としての資質能力を振り返って不足している力を付けるためだともいう．教育実習を経験した学生は一回りも二回りも成長してキャンパスに戻ってくる．その直接の資料になるものは,『教育実習日誌』である．実習校の指導教員が自分と同じ教職を目指すであろう(この時点では確実に教師になるとはかぎらないが)実習生に教員という忙しい仕事の中で授業を見て書いてくれる丁寧なコメントが『教育実習日誌』である．このコメントと大学の授業の担当教員からのコメントである教職カルテの両方を教職実践演習の資料として使いたい.『教育実習日誌』に指摘されているコメントと教職カルテのコメントを学生に整理させてその関連性を考えてもらう．その際，重要なことは問題点だけを挙げることに終始せず,「成果と課題」を双方のコメントから読み取ってもらうようにしている．

教職カルテを打つことは大変な労力である．とにかく時間がかかるのである．春休みに早く終わらせてしまおうと意気込んで打ち込んでみたもののコンピュータの接続時間が過ぎてその日打ち込んだ分全てが登録されず水泡に帰した．以来教職カルテに積極的に取り組めない日々が続いているが，この文章を書いて気を取り直して再度やってみる気には少しはなっている．

**謝 辞** このシステム構築と運用については, LT開発室の全面的な協力によるものであり, 渡辺博芳室長をはじめ, スタッフのみなさまのご協力に感謝いたします.

なお, 本稿は 2 節を樋浦, 3 節を草川が主に担当し，1 節と全体の整理を横山が行った.

**参考文献**

[1] 文部科学省　中央教育審議会,“今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)”, 2006
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707. htm, 2014 年 3 月 1 日アクセス
[2] 高橋輝次,“書斎の宇宙－文学者の愛した机と文具たち－”, ちくま文庫, 2013
[3] 佐々木賢,“ブラック化する教育”, 現代思想 2014 年 4 月号特集, 青土社, p. 51, 2014
[4] 谷川裕稔, 下坂剛, 山口昌澄, “学習支援を「トータルプロデュース」する”, 明治図書, pp. 91-92, 2005

[5] 佐藤学, “学力を問い直すー学びのカリキュラムへー”, 岩波ブックレット, 岩波書店, p. 16, 2001